

新しい教育関係ユニット2010年度活動報告

2010年度、「新しい教育関係ユニット」では、これまでの活動に加えて、チューリッヒ教育大学アラン・グッゲンビュール教授とともに『アラン・プロジェクト』を実施した。今回は、このプロジェクトの概要と結果について主に報告したい。

1. プロジェクトの目的

学校において、教師が子ども達の心を理解することはたやすいことではない。特に思春期に入った子ども達は、自分の気持ちを素直に語ることが少なくなり、大人は彼らの気持ちをとらえきれず、子どもたちも、いらだつ気持ちだけをぶつけてくることも多い。このようなとき、教師はどのような方法で子ども達と関わればいいのか。

スイス、チューリッヒ教育大学のアラン・グッゲンビュール教授（2010年度、教育学研究科附属臨床教育実践研究センター客員教授）は、校内で暴力をふるう子ども達や、子どもの葛藤の問題に長年にわたって取り組んできた。その中で教授が考案した「ミソドラマ」とは、子ども達に「何を考えているのか」と直接問いたずるのではなく、「物語」を媒体とし、それを演じることによって、自分の気持ちを自然と表現させる手法である。「物語」を用いた間接的な手法を用いることによって、子ども達が自分の葛藤や悩み、あるいはその解決法への示唆を表現しやすくなり、また、そうした表現は、教師が生徒の問題を理解する手がかりとなりうるのである。グッゲンビュール教授はこれまで、スイスの学校現場において「ミソドラマ」を施行し、子ども達の問題への関わりで実績をあげてきた。

そこで、今年度「新しい教育関係ユニット」では、グッゲンビュール教授が考案した「ミソドラマ」という新しい手法を日本の学校に適用し、ミソドラマの影響や生徒、教師の体験について検討を行うこととした（アラン・プロジェクト）。

これは、教師が子ども達の心を理解し、問題行動を示す子ども達に対してどのようなアプローチをすればいいのか、その困難な問題に対する示唆を得ようとしたものである。

2. 研究概要

本プロジェクトは、グッゲンビュール教授、桑原知子、および学校臨床研究会メンバー11名が中心となって行った。京都市内のA小学校とB中学校の2校に、9月から11月にかけてそれぞれ全4回の訪問を行った。なお、各学校につき1クラスに協力をお願いした。

実施した具体的内容は以下の通りだった。1回目の訪問では、教師にプロジェクトの説明を行い、クラスの雰囲気、人間関係、困っていることなどについて教師から情報収集を行った。得られた情報に基づき、クラスのテーマについて見立てを行い、それに合うと考

えられる物語および紙芝居を作成した。2回目の訪問で、生徒を対象にミソドラマのセッションを行った。セッションでは、ファシリテーターが物語を途中まで生徒に語り、その物語の終わりを生徒に作ってもらった。さらに、絵を描いたり話し合ってもらったり、実際に演じてもらった。それらの内容からファシリテーターがテーマを絞り、生徒達が現状を変えるために実現可能な内容を「コンクリートチェンジ」として選んでもらった。

3回目の訪問で、生徒を対象に2度目のミソドラマを行った。ここでは、1度目のミソドラマのセッション内容を踏まえたうえで、さらにクラスのテーマに焦点を当てた物語と紙芝居を作成し、それを使用した。4回目の訪問では教師へのフォローアップを行い、セッション後の様子や変化について質問を行った。

3. A小学校への訪問

1) 活動状況の概要

A小学校への訪問は全4回行われた。1回目は対象クラスの担任の先生や校長先生へのプロジェクトの説明、及び対象学級についての情報収集と学校や学級の見学を行った。ここで得られた情報をメンバー内で共有して、対象クラスの課題を見出し、学級に適した物語や紙芝居を準備した。この学級はまとまりがあり、大きな問題は見られないが、思春期という発達段階にあることから「性」や「死」などの大きなテーマに向かっていく時期だと考えられた。また、担任の先生からは学級内の役割や人間関係が固定化しているため、各児童の個性が発揮できるような集団になってほしいという希望が語られた。

そのため2回目には実際に児童と一緒に、様々な個性を持った仲間たちと未知の世界に冒険に出るという物語を用いてミソドラマを実施し、グループごとに劇を発表してもらった。児童たちは、恥ずかしがりながらも徐々にミソドラマに没頭していき、「性」や「死」のテーマを劇で表現する様子が見られた。

3回目には、それまでの価値が反転する世界を旅する物語を用いてミソドラマを行った。窮地を助けるヒーローや老人が登場し、自分たちも力をつけたいというような「自立」のテーマなども見られた。コンクリートチェンジでは「怒られている友達がいたら、それを庇って自分も正直に言う」ということが、学級の児童の多くに選ばれた。

2) 成果

後日、4回目にフォローアップのために担任の先生にお話を伺った際、「このプロジェクトとの関連はわからないが、学級内のグループが変化したり、これまでコツコツ頑張ってきたが目立っていなかった子が注目されるようになってきた」ということが語られた。また、「春より子どもたちの優しい、温かい感じが出

てきたので、こちらもお母さんの感覚で見守れるようになってきた」との言葉も聞かれた。ミソドラマをすることで学級に直接的な影響を与えたといへないが、子どもたちの持つエネルギーが活性化され、学級の変化につながるきっかけになったとも考えられよう。成長段階にある子どもたちは、これからも様々な課題や変化を経験することになるが、それを乗り越えていける力は十分に感じられた。

学校現場に訪問し、先生方のお話を聞いたり、ミソドラマを実施して子どもたちの持つテーマに触れ、彼らの持つ力や課題について直に感じられたのは大きな成果だった。



▶セッションの様子



▶セッションの様子

4. B中学校の訪問

1) 活動状況の概要

A校と同様に全4回訪問し、1回目は学級を見学して学級の課題について情報を集めた。担任の先生からは、学級では学習や課題、自分自身のことについてはしっかりできると思うが、人間関係をうまく築いたり、他の人のことについてもっと関心をもってほしいという希望が語られた。

そのため2回目には集団で危機的状況に置かれるという物語を用いてミソドラマを実施した。物語の終わりを考えるグループごとの話し合いでは、なかなか動き出せないグループもあったが、大人の指示のない中で何とか主体的に動き出そうという動きも見られた。劇では「最後は夢だった」という終わり方など、葛藤をどのように引き受けるかがテーマとして表現された。コンクリートチェンジでは「友達のことを考えなかったりすることがあるから、友達とコミュニケーションを取ったり、相手のことを考えながら行動する」ということが、学級の児童の多くに選ばれた。

3回目には、単語の書かれたカードを手がかりにディスカッションを行った。コンクリートチェンジでは「先生と生徒でもっと話し合ったらいいのではないか。男女で距離があるので、男女でもっと話し合えると良い」ということが、学級の児童の多くに選ばれた。

2) 成果

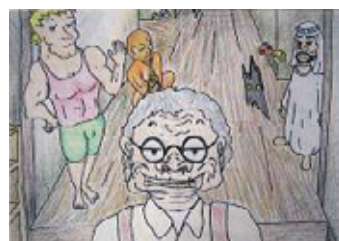
後日フォローアップのためにB校を訪れ、担任の先生からお話を伺った。先生によれば、「セッションはちょうど後期の目標を考えた1週間後位の時期で、前期は“合唱”という1つにまとまるものがあったが、後期はそのようなものがないので、ややもすればバラバラになってしまう可能性があったが、タイミング的に適切で、ちょうどよい追い風になった。セッション後、1～2週間位は“随分クラスが変わったな”という印象があった」とのことであった。

B校においても、今回のプロジェクトが直接的な効果や影響を与えたかどうかは明らかではないが、何らかの「インパクト」があった可能性も存在する。

また、ミソドラマの目的の一つとして、「子どもたちが考えているが上手く言葉にできないことなどを先生にも共有できるようにする」ということがあるが、今回のセッション中に出された「先生や他の人とコミュニケーションがあった方がいい」という生徒からの意見が、先生がもともと感じておられたクラスのテーマと合致していた。その点において、クラス集団のもっているテーマが、今回のセッションを通すことで明確になり、教師・生徒を含めたクラス内で、課題テーマが言語化され、意識化されたことは、今回のプロジェクトの成果の一つとして考えられるだろう。



▶セッションの様子



▶紙芝居

5. 今後に向けて

以上、本プロジェクトの概要と成果について概観を行った。「ミソドラマ」は日本では馴染みが薄く、本プロジェクトはその手法を日本の学校現場に応用する初の試みであった。今回の学校訪問では、セッションの中で生徒の心理的テーマや、生徒同士および教師・生徒間の人間関係に関するテーマなどが表現された。また、参加メンバーの感想からは、子ども達の「力」を感じさせられた有意義な取り組みであったことが示された。この手法については、今後さらに改善を積み重ね、教育現場に資する方法の開発・実践に努めたい。

最後になったが、本プロジェクト実施に快くご協力いただいたA校、B校の先生方に心よりお礼を申し上げます。(文責：桑原 知子・学校臨床研究会)